

3. 重要な種と生息環境

各種ごとに記録されたメッシュの数を表 7-5 に示す。メッシュ図で宗像市が占めるメッシュの数は約 475 であるから、これに対する各種の記録メッシュ数を全メッシュに対する割合 (%) として示している。きわめて大雑把ではあるが、この数値は分布域の広さの指標とみなすことができる。

もっとも広く分布するのはヌマガエルとニホンアマガエルで、分布域は市面積のほぼ 44%、35% を占め、次いでニホンアカガエル・ウシガエルの 16% と続く。カスミサンショウウオ、ニホンヒキガエル、タゴガエル、シュレーゲルアオガエルのメッシュ数は産卵場所のメッシュ数であり、成体は周囲の山林に広く分散して生活するから、実際の分布域は表中の値より大きいはずである。爬虫類の分布データは乏しいので確定的なことは言えないが、シマヘビ (10%) が圧倒的に多いことは確かである。

既述のように、爬虫類の分布データは乏しいので評価は困難であり、とくに重要な種は指定しなかった。両生類では、表 7-4 を参考に個体数が少なく分布域の狭い種、および今後生息環境の変化から減少が想定される種を重要な種として次の通り選定した。

(1) カスミサンショウウオ

戸田山から城山、孔大寺山にわたる東部山地の山麓部、用山から牟田尻にわたる西部山地の山麓部、名残北西部、大島東部に散発的に分布している。許斐山では過去に記録があるが、新立山から磯辺山にわたる地域では見つかっていない。隣接する岡垣町では湯川山の山麓部で採取され、福津市では深田の西にあたる名見山麓、用山・大井に接する手光、許斐山麓部に分布している (福岡県民生部、2000; 津屋崎町自然環境調査研究会、2004)。産卵場所は山地水田の溝、山道の水溜り、溜池奥の湿地、用水路の枡などで、卵塊の数から推定していずれの場所においても個体数は多くない。成体は産卵期に水辺に出現する以外は周囲の森林、竹林などで生活し、人目に触れることはほとんどない。日本の小型サンショウウオの代表種であるが、都市部では減少しつつあり、京都・大阪地域のカスミサンショウウオは絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている (環境庁、2000)。

(2) ブチサンショウウオ

城山山系のみから知られている。この種は宗像市内の希少な種であるのみならず、県内最北部の集団で、かつもっとも海岸近くに分布する集団として貴重なものである (倉本、2002)。山地の森林内に生息し、産卵は谷川の伏流で行われる。その生息環境から推定して個体数が減少するとは思われないが、少なくとも現状を維持する必要がある。隣接する岡垣町高倉でブチサンショウウオらしきサンショウウオが砂防ダム工事中に見つかっているが、正確な同定はされていない。福津市では南東部の本木の山地で記録されている (福岡県民生部、2000)。

(3) アカハライモリ

聞き取り調査によると、以前は各地の水田域の水路や溜池で比較的普通にいたが最近ではめっきり減少したという。今回の調査で生息が確認された場所はいずれも山間部の水田や畑地の溝、小さな池で、個体数は多くない。サンショウウオと異なり、成体は繁殖後も水中で生活し、変態した幼体だけが上陸して地上で生活する。卵は水草の葉に包むように産みつけられる。したがって、常時水の溜まった溝や池が生存のために欠かせないが、近年このような場所がきわめて少なくなっている。

(4) タゴガエル

ブチサンショウウオ同様、山地に生息する種であり、大穂・野坂のように海拔 100m 程度の場所にいるのは珍しい。産卵は谷の伏流水中で行われ、この時期には地下からくぐもった鳴き声が聞かれる。磯辺山では林道脇の切通しで水のしみ出てくる場所の奥で鳴いていた。幼生はほとんど餌をとらず、多量の卵黄を栄養として生育する。福津市では許斐山と本木山地で記録されている（福間町民生部、2000）。

(5) ツチガエル

本来、日本の水田域に広く分布していた種であるが、最近では山間部の谷に限定されてしまった。今回生息が確認できた場所はいずれも山地の流れや山際の水田、畑地の溝であった。幼生で越冬するため、年中安定した水のある水域でないと生存できない。水流の緩い河川域に生息する可能性はあるが、市内のそのような場所で鳴き声を聞いたことはない。福津市では対馬見山付近の谷と本木の谷で記録されている（福間町民生部、2000；津屋崎町自然環境調査研究会、2004）。

なお、トノサマガエルは宗像市内ではすでに絶滅したとみなされるため、重要な種として選定しなかった。また、ニホンアカガエルは福岡県 RDB で絶滅危惧Ⅱ類に指定されているが、宗像市では比較的多く見られるため、重要な種から外した。